

「医師・看護師・介護士など在宅医療に関係した職種の方と
在宅で看取りをされた家族の経験談を通じて市民啓発に役
立つ市民講座開催への支援及びアンケート調査」

申請者 大西 和子

所属機関 みえ生と死を考える市民の会

職名 会長

所属機関所在地 三重県津市江戸橋 2-174

提出年月日 2011年7月30日

平成23年6月18日(土)13時より三重県立文化会館大ホールにて、第13回「みえ生と死を考える市民の会」の記念講演を行った。前半は中村好江さんによるトランペット演奏、後半は国立がん研究センター名誉総長・垣添忠生先生より、ご自身が体験された「妻を看取る日」について講演して頂いた。参加者は約560名であった。

中村好江さんによる演奏は、参加者の心に響く演奏で、講演に向けて参加者の心の準備ができたよいオープニングとなった。参加者からも、良い演奏だったという意見が多かった。

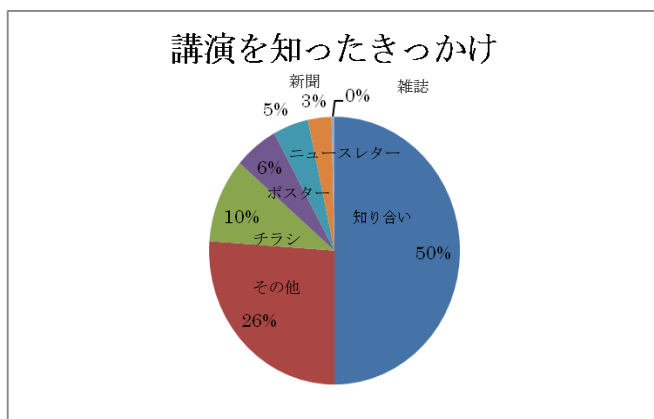
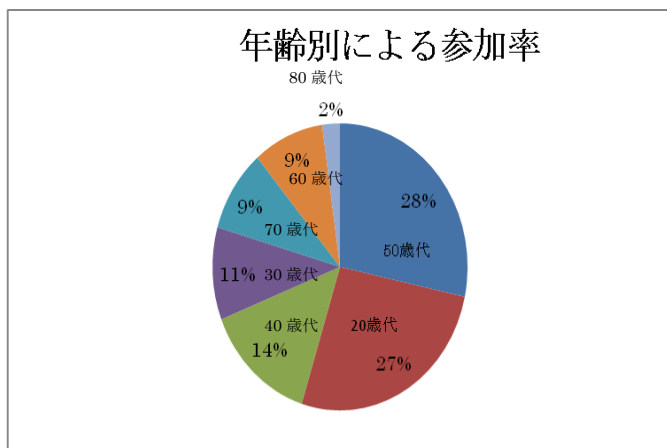
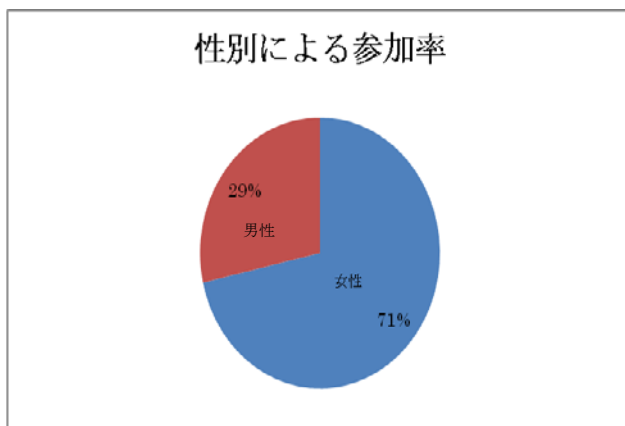
医師である垣添先生の講演内容は、妻の希望により最期を病院ではなく在宅で看取るために医療機器の準備や家の環境を整備し、妻が亡くなる4日間を住み慣れた自分達の家で妻とともに時間を過ごしたことや、妻が亡くなってからの悲しみを仕事などで紛らしていたこと、今では、生前妻が好んでいた場所を妻の写真を持って訪れていることを話された。つまり、妻の死後、身体はないが、垣添先生の心のなかに、妻が生き続けていることに気づいたことで、悲しみを乗り越えたのだと感じた。

多くの参加者は、「垣添先生の妻への深い愛があるからこそ、最期を自宅で看取ることができ、亡くなったあとも妻を思い続けながら生活を送っていることに感銘を受けた」、また「垣添先生の妻を羨ましく思う」といった意見が聞かれた。きっと、参加者自身、妻の立場や垣添先生の立場に置き換え、自分は夫にそこまでしてもらえるのだろうか、あるいは、妻を先生のように愛情を持って最期まで看取り、その後も、妻を思いながら悲しみから立ち直ることができるのだろうかなど思ったのではないだろうか。今回の講演では、参加者は垣添先生のような行動がとれるかどうかは別にして、配偶者の死後の悲しみからどのように立ち直ったかという具体的な方法を学ぶよい機会だったといえる。

今後も、私たちの市民活動では、今回のように生きるとは何か、死とは何かを考えることのできるきっかけ作りを続けていきたいと考えている。

今回、今後よりよい記念講演を続けていくために、参加者にアンケートをとった。アンケート回収率は48.1%であった。講演の参加者の7割以上が女性であり、年齢別による参加率をみると、20代(多くは看護学生)が最も多く、次いで50代であった。講演は土曜日に開催し、タイトルが「妻を看取る日」であるにも関わらず、男性の参加率が低いため、今後、男性にも参加できるようなプロモーションが必要である。講演を知ったきっかけでは、「知り合い」を通じてが、もっとも多かった。市民に講演の開催を知ってもらうよう、新聞、チラシ、ポスターを利用しているにも関わらず、講演を知ったきっかけは「知り合い」が最も多かったので、講演のお知らせをする際の工夫を考える必要がある。

自由記載によるアンケート内容では、家族を亡くした参加者は、垣添先生の講演内容は身近に感じ、生きていく方法が見出せたという意見があった。また、家族を亡くした経験がない参加者においては、垣添先生の妻に対する思い、在宅で看取る大変さや身近な人が亡くなった後の支援の必要性などを感じていた。



(公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団による)

みえ生と死を考える市民の会（発足13周年）記念講演会

妻を看取る日

講師 垣添 忠生 氏（国立がん研究センター名誉総長）

（財団法人 日本対がん協会会長、聖路加看護大学大学院特任教授）



私の妻は、06年春に右肺に新たな小さな影が見つかり、肺がんの診断で陽子線治療を行いました。半年後に右肺門部に転移が生じ、小細胞肺がんと特定され、化学療法と放射線治療を行いました。多発性転移で2007年12月31日、自宅にて死去しました。妻の病歴と、4日間の在宅医療から考えたこと、そして妻亡き後の私の悲嘆との向き合い方、などについてお話申したいと思います。

垣添 忠生



垣添忠生先生の紹介

1941年生まれ。1967年東京大学医学部卒業。都立豊島病院、東大病院などを経て、1975年から国立がんセンター病院に勤務。手術部長、病院長などを務め、2002年総長に就任。2007年に退職し名誉総長になる。財団法人日本対がん協会会長、財団法人がん研究振興財団理事。「妻を看取る日」は、妻との闘病生活、自宅での看取り、妻亡き後に押し寄せてきた絶望感と立ち直るまでの道のりについて書かれた本であり、大きな話題となりました。

主な著書に『がんを防ぐ』（主婦の友社）『前立腺がんで死なないために』（読売新聞社）『患者さんと家族のためのがんの最新医療』（岩波書店）など。

日時 2011年 6月18日(土)

午後1時～3時（受付 正午より）

オープニング：トランペット演奏 中村好江さん他



会場 三重県総合文化センター 大ホール

入場料 前売券：一般 800円 会員・学生400円

当日券：一般 1000円 会員・学生500円

学生の方は学生証を当日
ご提示ください

* 前売券の販売方法については、裏面をごらんください

主催：みえ生と死を考える市民の会

後援：三重県医師会・三重県保険医協会・三重県看護協会・三重大学・三重県立看護大学・四日市看護医療大学

三重大学医学部附属病院がんセンター・藤田保健衛生大学七栗サナトリウム・三重聖十字病院・三重県社会福祉協議会
三重県健康管理事業センター・三重いのちの電話協会・三重県医療ソーシャルワーカー協会・南勢地域緩和ケアネットワ
ーク・三重中勢緩和ケア研究会・北勢緩和ケアネットワーク・松阪市民病院・松阪厚生病院・NHK 厚生文化事業団中部支局
NHK 津放送局・三重テレビ放送・レディオキューブFM三重・三重緩和医療研究会

* 13周年記念講演会は、公益財団法人 在宅医療助成勇美記念財団の助成を受けています